

高知精神保健

発行所 高知市丸の内1丁目2-20
 高知県子ども・福祉政策部障害保健支援課内
 高知県精神保健福祉協会
 電話：088(823)1111・088(823)9669(直)
 FAX：088(823)9260
 E-mail：kochi-mhwa@outlook.jp
 発行人 数井 裕光 編集人 諸隈 陽子

第291号

第64回高知県精神保健福祉大会開催報告

令和7年10月15日に高知県立県民文化ホール（グリーン）において、第64回高知県精神保健福祉大会が開催されました。今大会の実行委員長は一陽病院の諸隈陽子院長が務められ、「意志あるところに道は開ける～希望は成功へ導くかけ橋～」をテーマに開催されました。



（左から）数井裕光会長、諸隈陽子大会実行委員長、池透暢氏、渡邊英孝氏

まず、高知県精神保健福祉協会会長表彰の表彰式が行われ、本年度は土佐病院の看護師、西岡誠二氏が表彰されました。西岡氏は、長期入院者の地域移行支援や、医療安全管理の推進に積極的に取り組まれた功績が称えられての受賞となりました。

次の講演ではお二人の講師からお話をいただきました。まず、高知県立障害者スポーツセンター所長の渡邊英孝氏から、「障害のある方とスポーツ」と題して、精神障害者と高知県立障害者スポーツセンターの関わりなど貴重なお話をいただきました。

来場者アンケートには、「スポーツが身体だけでなく、精神面にも大きく影響していることが知れた」「障害者スポーツを支える立場の方と、実際にスポーツされる方の両者のお話を聴けてとても良かった」といった感想が寄せられ、改めて、障害を持つ方にとって、スポーツが生きがいづくりになっていることに気づききっかけとなりました。



第64回高知県精神保健福祉大会看板

続いて、パリ2024パラリンピック競技大会の車椅子ラクビー日本代表キャプテンで、アモーヴァ・アセットマネジメント株式会社の池透暢氏から、「生きて、生きる」と題して、講演



渡邊英孝氏



池透暢氏

目次

第64回高知県精神保健福祉大会開催報告 1
 高知県の精神障害者スポーツについての対談 2
 精神保健福祉協会「地域研修」について 5
 令和7年度卓球大会&ポッチャ大会 6

令和7年度「救急医療から地域へとつなげる
 自殺未遂者ケア研修会」の開催報告 7
 ご芳志への御礼 8
 高知県精神保健福祉協会のメールアドレスの変更について 8

とデモンストレーションが行われました。池透暢氏の講演では、交通事故に遭われてから苦難を経て、「活きる力」を得たという力強いメッセージに来場者は熱心に耳を傾けました。「困難は成長の時期と知った」「不断の努力を続け、大きな夢を手に入れた池さんの精神力に感動した」「オリンピックは人間の可能性、パラリンピックは人間の努力の可能性という言葉に共感した」など、講演に心動かされた



池透暢氏にタックルを受ける参加者

感想がたくさん寄せられました。講演後のデモンストレーションでは体験希望者が実際に競技用の車いすを使用してスラロームを通過したり、ボールを持ったまま相手のタックルから逃げ切りトライを目指すなどの動きのほか、実際に池さんからタックルを受けるという貴重な体験をすることができました。また、講演終了後には、サイン会や記念写真の撮影会も行われ、学びとふれ合いのあるプログラムとなりました。

会場のロビーでは、オーテピア図書館の出前図書館のオープンや、事業所のお菓子販売、スピリットアートで入賞された一陽病院のデイケアの皆さんの作品展示などもあり、3時間があっという間に感じるほど充実した大会となりました。

これからも、高知県精神保健福祉協会は、県民の皆さまに精神保健福祉をより身近に感じていただけるよう福祉大会を初め、様々な機会を通じて情報発信して参ります。ご来場いただきました皆さま、ありがとうございました。

田所淳子 × 渡邊英孝

高知県の精神障害者スポーツについて、対談の様子をお届けします

第64回精神保健福祉大会の感動も冷めやらぬ翌日、20年以上にわたり高知県の精神障害者スポーツを盛り上げてこられた、田所淳子氏（(公社)日本精神保健福祉連盟精神障がい者スポーツ推進委員会委員：安芸福祉保健所）と渡邊英孝氏（高知県立障害者スポーツセンター所長）に、高知県の精神障害者スポーツについて対談していただく機会を設けました。

20年来のお付き合いで、共に精神障害者スポーツの礎を作り上げてこられた戦友のような関係性のお二人。終始笑顔で和やかな雰囲気の中、約1時間にわたって、熱く語りあってくださいました。

●高知県の精神障害者クラブチームの結成から全国障害者スポーツ大会に参加するまで

―田所氏「私の職業人生を変えることになってし

まった。巡りあえてなかったら、この業界の素晴らしさみたいなものを知らずに過ごしてきたんだろうなと思って、とてもありがたかったなあと思います。」

平成13年、厚労省は、「全国(身体)障害者スポーツ大会(昭和40年～)」と、「全国知的障害者スポーツ大会(平成4年～)」を、「全国障害者スポーツ大会」として統合し、その第1回大会を宮城県で開催することを決定した。

しかしその大会には、これまで全国大会開催実績のない精神障害者の参加が認められなかったため、実績づくりとして「第1回全国精神障害者スポーツ

(バレーボール)大会」を開催することに。その高知県チームの担当として、当時精神保健福祉センターで勤務していた田所氏が任命された。



まずチームを作るため、病院のデイケアにチーム結成をもちかけたが、飛行機移動と宿泊を伴う遠方の大会に参加できるメンバーは各施設で1～2名のみ。施設単位でチームを作るのは難しいと判断し、県内の各施設から参加希望者を募り、合同でチームを作ることに。申込者は9名。高知県立障害者スポーツセンターの体育館を利用し、練習を開始した。

そうして練習を重ね、いざ臨んだ全国大会は、大きなストレスとプレッシャーの中、緊張で足はガクガク震えながら迎えた。結果は初戦で福島県に惜敗。

「そこで負けて良かったかもしれん」と田所氏。翌年の高知での大会に向け、<地元高知で下手なところ、恥ずかしいところ見せられん>とメンバーがすごく盛り上がり、それから毎週日曜日に練習することに。

さらに、次年度の開催地であった高知県宛に、日本精神保健福祉連盟より<精神障害のバレーボール競技も採用してほしい>との要請もあり、県との協議を重ねた結果、オープン競技としての採用が認められた。

正式競技ではなかったが、県の計らいで選手団と同じジャージも支給され、「もうメンバーは大喜びだった」。結果は準優勝と、残念ながら優勝を逃したが、優勝チームが翌年の開催県である静岡県だったこともあり、「来年、リベンジや」「静岡に乗り込んで静岡をやっつける」とさらに練習を重ね、静岡大会では初優勝を飾った。

その後、全国大会の正式競技に採用される平成20年まで、当県チームは全国優勝4回、準優勝2回を成し遂げ、さらに正式競技となってからも、全国優勝2連覇という快挙を成し遂げている。

●精神障害の方にスポーツがもたらした影響について

—田所氏「精神障害の方は、大人になって病気になって、周りにそれを隠して「なんでこんな病気になった、甘ったれが」と親に怒られる人もいて、「自分は何でこんな病気になったがやろう」と思っていたのが、スポーツに関われるようになって晴れの日に行くと人生捨てたもんじゃないと、一度は諦めて、自分の人生なんやったがやろうと思っただのが違ったと、そういう体験をしてもらいたい」

「家と病院との往復しかしてなかった人がスポーツに来て、目的があって、課題があって、サーブが入るようになった、あるいは他の選手を見て、真似して、自分に技術がついていく、その技術が自分で分かる。そして、友達同士、メンバー同士で支え合える、慰めあえる、っていう団体競技やからそれも良かった。」

それだけでなく、「作業所に行ってみたくて、働いてみたい、とかステップアップする人がどんどん続出してきて、それとあまり入院をしなくなった。」という。「入院したら大会に行けない、調子を崩したらスポーツできない、練習できない。それとやっぱり適度に運動ができて疲れて、生活のメリハリがつく。」

そういった効果が目に見えて見られたので、メンバー自身はもちろん、家族やデイケアの職員さんたちも喜んでくれていた。

また、競技スキルだけでなく、大会に参加し、遠征するに伴い、社会性や協調性が必要になってくる。移動中の公共交通機関や宿泊施設の利用ルールやマナーを一つ一つ学び、経験していくことで、協調性や場面を見て読み取る能力も身に着いてくる。



そして、団体ならではの効果として、新しい選手が入ってきた時に先輩選手たちが面倒を見て、育てる、という成長も見られていた。

●これからの高知県の精神障害者スポーツについて

―田所氏「私が思うのは、こちらのセンターが幅広くスポーツが苦手な人も色々な動機づけの人も、大きな懐で受け止めてくれて、いろんな社会参加のチャンスを与えてくれるっていう、このスポーツセンターの存在がありがたいです。」

―渡邊氏「センターの中でも、元々障害者が参加できる教室ばかりやってたんです。でも最近は、この地域に、障害のある方が通える施設があって、入所施設もあって、その人たちやみんながスポーツしやすい場所であって、そこに一緒にやってくれる家族、友達、地域の方もウェルカムです、って形が理想なのかなと思います。競技になると、ルールや障害程度分けと言われるものが出てきますけど、健康づくりとか余暇のスポーツっていうのは、障害の有無に関係なく、ごちゃまぜでやる方がベストなのかなと思います。」

最近、全国的にもバレーボールをする人口が減ってきた。代わって、高齢の方でも参加しやすいボッチャが定着している。

若い年代で盛んになっているのはフットサルとのことで、今や全国に200チームほどあるという。また、バスケットボールのチームがある県もあり、

それぞれの地域で楽しんで活動をしている。

「全国障害者スポーツ大会」も、発達障害という概念が出てきた事で変化が生じているようだ。以前は特別支援学校に在学していると知的障害のカテゴリーで試合に出られていた方が、知的障害を伴わない発達障害、と診断されるようになると、精神障害のカテゴリーとなるようだ。そうすると、全国大会では、陸上や水泳の競技には出られない。精神障害にはバレーボールか卓球しか競技種目がないからだ。

ボッチャやフットサル、バスケットのように、地域で盛り上がっている競技もあるが、やはり、国が主催の全国大会という総合大会に参加することの醍醐味は大きく、そこに参加したからこそ得られる感動も大きい。

大会の運営上簡単にはいかないだろうが、発達障害の方が入ってきたこともあり、精神障害者保健福祉手帳を持っている人はここ数年増加の一途を辿っているのもう少し、公式競技の種類が増えればと願っている。



田所 淳子 氏

(公社)日本精神保健福祉連盟精神障がい者スポーツ推進委員会委員 (H15年～) 高知県安芸福祉保健所

<経歴>

- H13～21年 高知県精神障害者バレーボールチーム コーチ兼マネジャー
- H19～24年 高知県障がい者スポーツ指導者協議会理事
- H20～24年 中・四国ブロック障がい者スポーツ指導者協議会研修委員
- H28～ 日本パラスポーツ協会技術指導員として全国障害者スポーツ大会に派遣

高知県立障害者スポーツセンター 所長

<経歴>

- H12 日本身体障害者スポーツ協会 東京都多摩障害者スポーツセンター
- H14 財団法人高知県ふくし交流財団入職 障害者交流課(障害者スポーツセンター)
- H20 団体統廃合に伴い、社会福祉法人高知県社会福祉協議会所属
- H25 高知県社会福祉協議会 他課の職務に従事
- H31 障害者スポーツセンターに再配属



渡邊 英孝 氏

精神保健福祉協会 「地域研修」について

高知県精神保健福祉協会 副会長・研修委員長
(高知県立精神保健福祉センター 所長)
山崎 正雄

精神保健福祉協会では、研修委員会の活動の中で、様々な研修を実施してきました。医療現場や保健福祉の現場で活動されている方々を対象に、精神保健福祉について知識や情報を提供し学習する機会として、平成10年から「精神保健福祉従事者リフレッシュ研修」を実施してきました。大学や医療機関、保健福祉機関の医師、大学教員、専門職などの講師による講義を中心に、令和元年まで、4～5回の講義プログラムで研修を行ってきました。

(新型コロナウイルス感染症の蔓延があり、集合しての研修が困難となり、対面形式での研修は令和元年度の第22回の研修を最後に休止しています。)

「地域研修」は、こうした研修会・勉強会が高知県の中心地域の方々には参加しやすいが、郡部や中山間の方々には参加しがたいこと、また、精神保健福祉の研修を専門職などに限らず、当事者や家族を含む県民の方々といっしょにできる研修の機会を地域でつくりたいという思いから立ち上げました。平成13年の幡多での初めての地域研修以降、これまで多くの市町村の協力を得て、開催してきました。講師による講演だけでなく、いっしょにバーベキューをしたり、スポーツやフラダンスなどをいっしょに楽しんだり、またミュージシャンによる演奏を楽しんだり、作業療法士の方の協力で、手作り工作をみんなで行ったりしてきました。これも、新型コロナウイルス感染症の影響で、休止していましたが、今年度は規模を縮小した形ではありますが、南国市で開催



することができました。以前のような、食べて、踊って、楽しんでが難しくなりましたが、講師の話聞いて勉強し、みんなで工作をして楽しむことができました。今回、南国病院アウトリーチチームの山本真理さんからアウトリーチを実践してのお話、南国病院の石田青鳥先生から先生がこれまで実践されてきた人に寄り添った医療のお話など、心温まるお話を伺い、これからの地域と医療、保健福祉を考える上で大切なことを教えていただきました。また、県内いくつかの地域でアウトリーチを実践されている方々（みんなは、仲間と呼び合っています）からも、単にアウトリーチ事業ではなく、人と人をつないでいくネットワークづくりの大切さを伝えていただきました。講義の後は、みんなでレクリエーション(工作タイム)で盛り上がりました。

地域で暮らすすべての人々が、障害の有無や程度にかかわらず、自分らしい生き方ができるように、研修をとおして、ところをつなぐ活動を続けていきたいと思ひます。



令和7年度卓球大会&ボッチャ大会

藤戸病院 安岡義仁



藤戸委員長の開会の挨拶

令和7年10月24日、令和7年度卓球大会&ボッチャ大会が開催されました。

コロナ禍以降、入院やデイケアの療養環境においてスポーツと触れ合う機会は激減しています。さらに高齢化も相まって当事者のスポーツ離れは加速しているように思

います。しかし、障害者スポーツの意義は、身体的・精神的健康の維持向上、社会参加の促進、そして共生社会の実現にあり、今大会においてもより多くの方に『スポーツを楽しんでもらう』ことを目指しています。そんな中、令和7年5月、第1回総合福祉委員会で、今大会について話し合いを行いました。卓球大会の参加人数は、今年度も減少が予想される為、団体戦は休止とし個人戦のみで開催することとしました。また、競技種目を卓球だけにこだわらず、高齢者にも参加しやすい新しい種目の導入を検討し、高知県デイケア連絡会様が主催で開催していたボッチャ大会の運営を引き継がせて頂くことで、第1回ボッチャ大会として今大会で同時開催する運びとなりました。

大会当日朝、会場準備ではボッチャコートラインテープ貼りを高知県障害者スポーツセンター様にもご協力いただき委員総出で無事に張り終え、開会式を迎えました。開会式後、午前中に卓球大会の男子と女子の予選リーグ、決勝トーナメントを行いました。男子決



白熱した試合が繰り広げられたコート

勝は、海辺の杜VSハーモニー、セットカウント2対1で海辺の杜が優勝。女子決勝は、愛幸病院VSハーモニー、セットカウント2対0で愛幸病院が優勝、という結果でした。そして午後は、ボッチャ大会の予選リーグ、決勝トーナメントを行いました。決勝戦、高知ダルク（インテグレーション）VS藤戸病院（ふじっ子）の試合は、最終エンドで同点となり、タイブレイクのすえ高知ダルクが優勝、第1回大会の頂点に立ちました。



優勝チーム 高知ダルク

後日、デイケア連絡会様より、卓球とボッチャの同時開催について参加された皆様からはたいへん好評だったとの感想を伺いました。来年度、卓球大会は記念すべき第60回大会を迎えます。ボッチャ大会も第2回大会を開催できるよう準備する予定です。年間を通して、スポーツと触れ合える環境づくりをされている各施設の皆様のご協力があるの大会だと思っております。今後ともご協力よろしくお願い致します。それでは、来年度の大会でお待ちしております。



委員の皆様、お疲れ様でした

令和7年度

「救急医療から地域へとつなげる 自殺未遂者ケア研修会」の開催報告

高知県立精神保健福祉センター・地域自殺対策推進センター

公認心理師 政木 舞子

2025年10月3日に高知市文化プラザかるぽーとにて、「救急医療から地域へとつなげる自殺未遂者ケア～多職種・多機関で関わる支援の有効性～」の研修会を開催しました。



本研修は、自殺未遂者ケアにおける医療と地域の連携体制の構築と自殺予防医療や地域自殺対策に関わる人材の育成を目的として、2011年から継続的に開催しています。

今回は、本県の自殺未遂者支援の基盤づくりの段階からお力添えをいただいている札幌医科大学医学部神経精神医学講座の河西千秋主任教授に、ACTION-J研究のエビデンスに基づいた自殺未遂者への救急医療における初期対応から地域と連携した継続支援に役立つ複合的ケース・マネジメント（包括的介入）支援についてレクチャーをいただきました。

救急医療を併設する総合病院や大学病院をはじめとする10箇所の精神科医療機関から救急医、精神

科医、看護師や精神保健福祉士、心理士、作業療法士など、また地域の市町村や福祉保健所から保健師など、総勢40名が参加して下さいました。

続いて、2023年7月から高知医療センターと当センターとの協働事業として取組を開始した自殺未遂者支援事業「いのちつなげるHope to Life」の実施にあたり、救急医療を起点とする院内の多職種・他部門との連携体制をどのように構築してきたか、また地域との連携支援をどのように行っているかなどの実際について、高知医療センター救急科専門医の齋坂センター長、精神科リエゾン担当の岡村看護師、藤井ソーシャルワーカーと当センターとで実践報告を行いました。

そして本研修の最後は、自殺未遂者やその家族への支援について実践的に修得するための多職種・多機関で考える事例検討を行い、モデル症例を通して10Essentials,ver.1.1（メンタルヘルス・ケアと自殺予防のための教育モジュール）に基づく自殺のリスク因子を抽出し、自殺のリスク評価の仕方について学ぶとともに、中・長期的な継続支援について、多職種の視点や関わりから活発な意見交換がなされていきました。

今回のように、医療や地域の機関



が一緒にケースの支援について考えたり、地域課題を共有できる場が積み重なっていくことで、双方の関係性や相互理解が深まり、それぞれの役割や強みを活かした連携のあり方が構築促進されていくことを期待しています。

また現在、本県では人口減少や過疎、高齢化などの地域課題もあります。また社会資源は中山間地域になるほど少なく、医療体制も十分に整備されていない実情もあります。

そのため地域の精神保健は、保健師等の日頃の保健活動などに支えられている面が強く、それだけでは対応が難しい思春期、ひきこもり、依存や自殺問題など、様々な困難事例が多く潜在化しています。

今後はさらに地域医療構想の推進が求められていることから、医療機関と地域が連携するアウトリーチ事業をはじめ、自殺未遂者支援事業や重層的支援体制整備事業等、地域づくりに向けた様々な実践を連動する方策として活用しながら、地域を耕し、人材を育て、生きづらさを抱えた方を丸ごと支



えていくという「地域包括ケアシステム」の体制づくりを目指していくことが本県のミッションであると感じております。

皆さまの日頃からのご支援とご協力に感謝を申し上げますとともに、今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

文責 高知県立精神保健福祉センター
政木 舞子

ご芳志への御礼

本年度開催の福祉大会へのご寄付をありがとうございました。

いずみの病院	上町病院
高知こころクリニック	さなだクリニック
三宮心療クリニック	はりまや橋診療所
渭南病院	宇賀 茂敏
竹本病院	田野病院
津田クリニック	三和水産(株)
三誠産業(株)	四国医療サービス(株)
大伸フーズ(株)	(株)太陽
(有)フジムラ	ワタキューセイモア(株)
四国中検(株)	武田薬品工業(株)
中澤氏家薬業(株)	Meiji Seikaファルマ(株)
ヤンセンファーマ(株)	

(敬称略:順不同)


高知県精神保健福祉協会の
メールアドレスが変更になりました

新しいメールアドレス

kochi-mhwa@outlook.jp

お手数をおかけしますが変更をお願いいたします。

Otsuka-people creating new products
for better health worldwide

 Otsuka 大塚製薬株式会社
東京都千代田区神田町2-9